

武田信玄の文芸

清 水 茂 夫

— 信玄の文芸の周辺 —

武田信玄は、大永元年（一五二一）十一月三日生まれ、天正元年（一五七三）四月十二日に没した。大永元年九月には、今川氏親の部将福島正成の一万五千の軍が大井氏の属城である富田城（中巨摩郡甲西町戸田にあった）を攻め落としたのを聞いて、深夜身重の武田信虎夫人は、積翠寺の要害城に難を避けた。幸いに十一月十六日に武田軍は飯田ヶ原で福島勢を破り勝利を得ることができたが、その戦乱の最中に信玄は誕生したのであつた。また、天正元年（一五七三）二月に、信玄は雄団を抱いて野田城を攻略し長篠城に入つたが、病のため遂に信州駒場で五十三歳の生涯を閉じたのである。それが、病のため遂に信州駒場で五十三歳の生涯を閉じたのである。その生涯は兵馬倥偬の戦乱時代であつたから、幼少時代に学問文芸の修行の暇とてなく、格別教えを受けた師とてなかつたのであらうと主張する者もあるが、それは誤りである。

甲斐国巨摩郡西郡筋大井庄鮎澤村（現、中巨摩郡甲西町）に今は古長禪寺という臨濟宗妙心寺末の寺があり、『甲斐国志』によればこの寺は夢窓国師の開いた寺であるという。信玄の母即ち信虎の夫

人である大井氏に請われて住し、夫人の外護を得て禅風を挙揚した賜紫岐秀元伯和尚があつたことを見落としてはならない。大井夫人は菩提所を長禪寺と定めるほどの尊敬と信仰を持っていたので、嫡子晴信をはじめとして信繁・信廉等にも岐秀和尚について儒学・禪要・治国の法などを学ばせたのである。後の事になるが、天文二十二年（一五五二）五月七日大井夫人は長逝すると、鮎澤村の長禪寺に丁重に葬られた。法名は瑞雲院殿心月珠泉大姉。後、晴信は亡き母を開基とし、岐秀和尚を開山として甲府愛宕町に瑞雲山長禪寺を建立した。岐秀和尚が老いたことをも配慮したのによるのであらう。寺域は長禪寺山を背景にした広大な地で府中五山の第一とされている。ここでは大井夫人の墳所を御北様の墓と称し、寺宝には逍遙軒信綱の渡唐天神自画贊一幅、瑞雲院殿の肖像一幅、晴信幼時所用の玩具等が所蔵されている。こんな事からも信玄は大井夫人に育てられつゝ岐秀和尚に学んだことが推しはかられるようと思われる。晴信は永禄二年（一五五九）には岐秀和尚を導師として出家し、信玄号を贈られている。従つて晴信と記した短冊や色紙は永禄二年春以前のものと認めてよいであらう。永禄二年五月に信濃松原社に治

めた祈願文が、信玄と記した初見のものとされている。信玄の現存する文芸作品は多数が晴信と記されている。

晴信の和歌を考察するにあたって、その周辺を見渡す時、父の信虎も母の大井夫人も和歌に関心を持っており、その影響が晴信にも反映しているように思われる。信虎が『三体和歌』の奥書を所望したことなどが、万里小路惟房の「惟房公記」の永禄元年（一五五八）六月十五日の条に見える。『三体和歌』は、建仁二年（一二〇二）三月十五日夜、和歌所で催された六首歌合である。御鳥羽院が歌のさまを知れる程度を御覧になられようとして、三月二十日に給題され、二十二日には詠進され、披露が行われた。次いで「暮雪」の題の当座歌会があつて終わった。歌を召されたのは和歌所の寄人の中、藤原良経・慈園・藤原定家・同家隆・寂蓮・鴨長明が、参加している。その六首歌は、三体即ち「ふとく大きに」（「高体」とも）、「細くからび」（「瘦体」）、「やせすごき由也」とも、「艶にやさしく」（「艶体」）「ことに艶」とも）という三種の美的様式をそれぞれ春・夏・秋・冬・恋・旅に配したものと題としており計四十二種である。『三体和歌』が新古今集の歌風を支える代表的な美的様式であったから、信虎はそれに強い愛着を持っていたのであらうか。

信虎の夫人は大井信達の長女であり、晴信・信繁・信廉はその子であった。甲府市の長禪寺には逍遙軒信廉の画いた絹本着色大井夫人肖像がある。像上には和歌一首があり、夫人の自詠であるといふ。春は花秋は紅葉の色々も目数つもりてちらばそのまゝ

戦乱の世を賢く健気に生き通した女性の遺吟として心をうたれるものがある。

信虎は天文五年（一五三六）今川氏親の媒介で晴信の妻に三条左

大臣公頼の女を迎へ、翌年には自分の女を今川義元に嫁がせた。武田・今川両家が親密になると共に武田家の家風は既に公卿文化化していた今川家を通してその影響を受けたに違いない。三条夫人の姉は細川晴元に、その妹は本願寺の大谷光佐に嫁している。また晴信の妹お菊御兩人は永禄初年に今出川大納言晴季卿の廉中となつてゐる。武田家中はますます公卿文化が色濃くなつていつた。そうした中で晴信の和歌にもっとも影響したのは、冷泉大納言為和卿（一四八六—一五四九）であつたと思われる。為和卿は為広の男で正三位権大納言民部卿となつたが、天文十年七月二日に出家し、法名を静清と号し、天文十八年七月十日駿河で薨じた。『為和卿集』には、「天文七年八月、武田信虎亭にて大井宗藝初めて参会の時、信虎歌よみて宗藝へ可キ遣サル之由申されける時、當座に彼の宗藝歌道熱心の法師に侍る間かくなむ」と前書し、

いまよりや契り置きなむしるや君世々のねざしの和歌の浦松と吟じ与えている。『為和卿集』によれば、今川氏親の分国の中に為和卿の知行四箇所があつて、氏親よりそれを渡すとの由で、一兩年連上を渡したが、遠行の間に今川氏が不履行なのを訴願する為駿河に滞在した。その間に甲斐に来訪したのであつた。

為和卿が今川氏に和歌を通じての密接な関係を持つに至つたことは、『戦国武士の文芸』（米原正義著、桜風社刊）に詳細に記述されているが、甲斐に為和卿の和歌が武田氏を核として影響を与えたことは記述されていない。しかし為和卿の和歌が甲斐の和歌に影響を与えたことは、『為和卿集』を通して充分に把握することができるのである。父信虎の天文七年（一五三八）七月十六日付大館左衛門佐晴光（室町幕府の内談集）に出した書簡によると、大館が信虎を為和卿

へ紹介したこともある。次に『為和卿集』などより為和

卿の甲斐に來訪し指導した次第を簡略に掲げて置く。

天文八年四月ごろ、為和卿来る。一蓮寺で歌会あり。

天文九年八月三日、荻風、一色元成亭にて當座、於テニ甲州一也。

天文九年九月十三日、申刻に甲州を立つ。同十六日に駿州に下着。

：京都へ十月十七日上洛。

天文十一年二月十三日、於ニ高雲齋、武田大井宗藝晴信月次会、花風。既に晴信は月次会を開いていたように思われる。

同三月九日於ニ高白齋、積翠寺也。初花。

同八月十五日於ニケルニ板垣駿河信方亭ニ一會に、月前聞クレ雁ヲ。

同當座十五夜當日。

天文十三年二月三日甲州へ越とて今川へ暇申すとて富樫民部大輔かたへ紅梅の枝につけてかく申遣す。

甲州於テニ晴信亭月次会ニ一穴山信友頭役也。毎月十五日。愚官趣クにより九月十七日に延引。池上月。

同九月廿一日同月次。向山參河去る七月分頭役張行。紅葉色深。

天文十五年六月二日、京都より三条西実澄卿（時の大納言）四辻

季遠卿（參議中納言）下向甲州へ被ルル越ニ之間一會張行。

右の記述の中で「天文十一年二月十三日高雲齋において晴信月次会花風」などとあるのは晴信を中心として毎月歌会が催されていたと推定できる。この年晴信は二十二歳の青年であった。

（鷹狩）御狩するかたの、雪の朝明にいづれしらふの鷹とするらん（忍恋）いはじただつれなき人を陸奥のしのぶの山のおくの心を（名所関）清見がたみせばや袖の波の月かげ吹とめよ関の秋かぜ

二 和 歌

信玄の和歌としては、若草町加賀見法善寺所蔵の『詠百首和歌』が最も多くを収録しており、これは『武田晴信朝臣百首和歌』と題して、大小沢啓行校で出版された。この「百首和歌」と命名したのは、例えば藤原定家の『藤川百首』などの春二〇、夏二〇、秋二〇、冬一〇、恋二〇、雜二〇首から成るという構成とは違い、晴信が詠じた歌数は百四首で歌題は九〇であることから、概数をとつて百首和歌と命名したのであろう。歌は歌題を掲げて詠ぜられているところから題詠とみてよいであろう。次に幾首かをあげてみよう。

（早春ノ山）今も猶雪げながらにみよしのゝやまにや春の立ちはじ

めけむ

（海雲）みせばやな海づら遠くかすみ行難波のみつの春のあけばの（落花）尋ねばやちるはをしほの山ざくらさそふあらしに花や残る

と

（河款冬）玉川のきしの山ぶきさきしよりなみも色なる春のくれかた

と

（山月）よなよなにねられぬ物を秋のよはおもひいるさの山のはの月

（池月）雲もなき空のながめを広沢のいけよりをちの月のさやけさ（古寺月）思ひこしとよらの寺のあきの月おなじながめも心すむや

と

(海路) 更るともこよひはこゝに明石がたたゆたふ浪にうつる月か

げ

(神祇) ことしより更に千とせを住よしのふた葉の松の色はかはら
じ

(社頭祝) 君をいのる賀茂の社のゆふだすきかけていく代か我もつ
かへむ

右の諸歌の傍線を施した語は、いわゆる歌枕であり、題詠として作つたために、実景に触れた心情や風景の生々しい特殊性を表現することができず、類想類型に陥つてゐる。そこで機知的な修辞法によつて変化を歌に与えようとしたのである。歌枕を採り上げ、その縁語を駆使している。晴信の上記の歌には特に濃厚にその傾向が表われてゐる。

しかしながら、以下に記す和歌などに晴信自身の感情が率直に歌われているように思われる。

(朝鶯) 「まちわびしまやの軒場のくれ竹にねぐらさだめよけさのうぐひす」「まや」は「切妻屋根の家」のこと。待つていて始めて聞いた鶯の声よ。我が家軒端にある呉竹にねぐらを定めて、今朝初めて鳴いた声を、これからも続けて、聞かせて呉れよ、と願う晴信の鶯に対する愛着が自然に表現されている。

(田若菜) 「霜ふりし去年のふる葉もそれながらみどりにかへる小田の七草」「七草」は春の七草で、正月七日に七草の葉を入れて炊いた汁粥を食べるとその年の邪氣を払い、万病を除くといふ。一首は霜が降つて枯れてしまつた去年の七草のふるい枯葉は、もとのまゝでありながら、そのあたりに緑の色をした七草の新芽が田の中で萌え出たことだと、迅速な時節の変化と春の緑の新鮮さに対する喜び

が看取できる。

(岸柳) 「河そひのきしの春風ふくからに木ずゑなみよる青柳のいと」「青柳のいと」は、「細くてしなやかな青柳の枝を糸にたどへていう語」。一首は河岸の春風が吹くのに応じて、糸のように細い青柳の垂れ枝が動いて柳の木ずゑが波うつ如くであるの意である。

青柳の川風に吹かれる春の美しさを詠じてゐる。

(春月) 「雲はるふ四方のはる風吹くなべに秋よりさきの月の夕かげ」この一首は月は秋が素晴らしいと言わわれてゐるが、四方から吹く春風に雲がすっかり拭き払われてしまつたので、清らかな夕の月を秋より先どりして見ることができた、というのである。『新古今集』の後鳥羽院の「見渡せば山もと霞む水無川ゆふべは秋となに思ひけん」という歌があるのに影響を受けてゐるのであらうか。

(苗代) 「山河をまかせてみればはるきぬと苗代小田にかはづなくなり」「まかせて」は「田や池などに水を引いて」の意。一首は山から流れ出る川の水を苗代田に引いてくると、もう春が来たのだと思つて、蛙ががそのぬるむ水の中ではなくことよ、の意である。「山河をまかせてみれば春きぬと苗代小田にかはづなくなり」という單純さは晴信が全く農夫となつて、苗代を凝視しているように思われる。同類の佳吟を次に列举してみよう。

(雲雀) 霞より心もゆらぐ春の日にのべのひばりも雲になくなり
けさ

(早苗) 雨すぐる門田のたこのねれ衣はさでやけふもさなへとるら
し
(門田) は門の前にある田で屋
(敷継ぎの田) 「たこ」は農夫)

苗代から早苗をとつて田植する頃は五月雨の降り続く季節なので、

さぞ農夫たちは濡衣を干すひまもなく、そのまま田植えをつづけていることだろうと、農夫への思いやりの深かつた晴信の人間性が十分に流露しており歌も流暢である。

（五月雨）さみだれに庭のやり水せをふかみ浅茅がすゑ葉なみよするなり

（夏月）はしるして山のはかこつ夏のよは月見るからにあくるしのめ

（一首は縁側に出て月を見ていると短い夏の夜のこととて瞬く間に、

東の空に明け方の霞がたなびく。夏の夜のはかないことよの意。

（瞿麦）かつみても猶色ふかし常夏のいやはつばなけふの夕ばへ

（鶉河）そことなくながめもつゞくますらをが夜川にうつす篝火の影

（夕立）吹はらふ遠の外山のゆふ立にまだ雨のこす嶺のむら雲

（納涼）夕すみ岩井の水の底きよみまだきに秋の風かよふらし

（初秋露）秋来ぬと軒の忍ぶに風さてそでにしられぬ庭の朝露

（原鹿）ともをなみ真葛がはらにかりねしてさびしさそぶるさをし

かのこゑ

（秋田風）小山田のいなばおしなみ吹くかぜに月影うつす露のしら

玉

（秋雨）秋の夜はまどうつ雨のそぼつゝまくらに近きのきのたま

水

（野分）朝まだき野分の風の吹くからにはも籬もなびくくさむら（峰紅葉）そめてけりまなく時雨の降るまゝに色づく木々の峰のも

みぢは

（残秋）長月のそらにや秋のかへるらんとほざかり行く夜半の虫のよは

音

（冬月）さえさゆる夜半のあらしに雲はれて雪にひかりをのこす月

火

（千鳥）小夜ふけて川かせざむみ鳴く千鳥ともよぶこゑに月のかた

影

（炉火）夜をさむみ衣かたしき独り居のとこに思ひをおこすうづみ

火

晴信の和歌を特色づけているのに、恋の歌があることとも指摘しておきたい。歌は、恋恋・不遇恋・後朝恋・恨恋・久恋・絶恋の六の題に分かれ十五首である。ここに数首を掲げる。

（恋恋）かく思ふ心のそこの夢ならば覚めてもえやは人にかたらん

一首の意は、このように恋しく思っている私の心の底からの思ひが、もし夢だとしたならば、夢がさめてから、どうしてあの人にはこの恋の思いを打ちあけることができようか。とても恥ずかしくて打ち明けることはできないだろう。

（恋恋）忍びつゝいはぬものから今ぞしるあまたありける人のこころを

一首の意は、私ががまんして、恋心を告白しないばかりに心ひかれた多くの女の心の多様さが、今になって分かつてきしたことであるといふのである。恋恋は古今和歌集にも見えている。既に「忍ぶれば苦しきものを人知れず思ふてふこと誰に語らむ」などと詠ぜられていて、平安朝時代に恋の一類型となっていた。

（不遇恋）をのづから逢ふをかぎりの年月をふるはなみだのひまあらばこそ

「おのづから」は「偶然に」、「かぎり」は「逢うこと」を最後とし

て」の意。一首は偶然に逢った時を最後として、再び逢うことのない

「幾年月をすごしたことは涙のどどまる時とてない悲しいことであつた」という意である。「年月をふる」の「経る」に「降る涙」が懸けてある。「涙のひま」の「ひま」は「隙」で、涙の乾くひまもない」の意。

(不遇恋) たのめつゝこぬ夜あまたの袖の露今夜は月のかげもやどさじ

「たのめつゝ」は「必ず訪れると約束して頼みに思わせる」の意。古今集卷第十二にも「頼めつゝ逢はで年経るいつはりに徵りぬ心を人は知らなむ 朝恒」などの歌がある。

一首の意は「一筋に約束し、たのみに思わせていながら、あなたが訪れない夜が幾夜も重なつたので袖は涙の露ですつかり濡れている。今夜は月の光さえも袖に宿すことはないであろう。」というのである。不遇の恋の悲しさを詠じているが、生々しい悲歎の情を感じないのは題詠のためであろう。

(後朝恋) さ夜ごろもなれにし人の面影をうつしてとめよ庭の朝つ

「後朝」は「衣衣」とも書き、ぬいだ衣を重ねて共寝した男女が、翌朝めいめいの着物を着て別れることで、その翌朝にも言う。「さよごろも」は夜着る衣、よぎを言う。一首の意味は、「夜の着物を重ね、心を許して共寝して親しんだあの方のお帰りになる忘れたが、面影を、庭の朝露よ、うつしとめておいておくれ」という女の立

場でよんだ歌である。題詠とはいえ武将の青年時代の体験が反映している歌と思われる。

(後朝恋) うちつけに思ひぞ出づるたちかへり惜みし今朝の袖のう

つりが

「うちつけに」は「突然に」「だしぬけに」の意。「袖のうつりが」は「相手の袖にたきしめた香が自分の衣にうつり匂うこと」で、平安朝時代には貴族は各自が秘蔵の香や独特的の香を持ち自分の衣にたきしめたのである。一首は「名残り惜しい別れをして家に返つて来たが、なつかしいあなたの袖の今朝の移り香が、あたりに立ち込める」と、だしぬけに私はあなたが恋しくてならない。」の意である。

(恨恋) うらみわびあはれ幾夜か槻の戸をあくるまでとやひとりすむらん

「恨みわび」は「恨み悲しみ」「恨み嘆き」の意。「槻の戸」は「立派な材で作った戸」で「あくる」にかかる。一首は「待ついても待ついても来ない人を恨みなげいて、あゝもう幾夜になることだらうかと、夜が明けるまで一人寂しく住み続けてることよ」の意。

(恨恋) ゆうぐれはたのめぬ宿の庭の面にうらみをそふる萩のうはかぜ

「うはかぜ」は「草木などの上を吹く風」。

一首は「この夕暮れはとてもあの人人がこの家を訪ねてくるとはあてにもならないと恨みに思つていて、庭の萩の上をまるで恨みを添えるかのよう夜の風が吹きわたることよ。」の意である。

(恨恋) たのまずよ人の心のつれなさをうらむる程に夜もふけにけり

「つれなさ」は「相手が無情で自分の気持ちにこたえてくれない」と。薄情であることである。

一首は「あの人人は約束をしておいたのに来ない、あの人無情な心

などもう頗るにしまいと思つて、薄情さを恨んでいる中に夜はすつかり深くなつたことだ」の意。

（久恋）君こある涙の数はさ夜ごろもかさぬる袖もけふはくちなん一首は「訪れのない君を恋ひしたつて涙を流す数は夜を重ねて久しくなつたので、君と重ねて寝る衣の袖も今日は腐つてしまふに違ひない」の意。

（久恋）いつはりをたのむばかりにくらしきておもへばとをし過る月日は

一首は「あの人いつはりの約束を頼るだけで寂しく悲しく暮して來て、今過ぎし方を振返つて見ると経過した月日ははるかに遠いことである」の意。

（絶恋）さりともと待こし月の更ぬれば思ひたえても夜をあかすか

一首は「それでもあの人は訪れてくれるであろうと待ち続けたが、訪れることもなく月が傾き夜がふけたので、訪れの希望もなくなつて、夜をひとり寂しくあかすことである」の意である。

晴信は永禄二年（一五五九）五月ごろ信玄と改めたが、『甲陽軍鑑』などには信玄の吟じた和歌が散見する。

恵林寺の快川和尚から「両袖の桜漸々にて、此の花のもとに一所かまへ待奉るあひだ御立より候へかし」と使僧が来た。信玄は「花と承るにはまいらぬは野なり」と、恵林寺へ立ちより、その折、筆と料紙をとつて詠じた。

さそはずはくやしからましさくら花さねこん頃は雪のふる寺（『甲陽軍鑑』品第四）

永禄九年（一五六六）春、信玄は恵林寺・長禅寺を始め御成りの

寺々に連絡し、時宗一蓮寺で歌の会を催した。その日の朝、不図菊亭殿が一蓮寺に入御され、信玄は斜ならず悦んだ。

「松間花」と第して信玄の吟じた歌は

たらならぶかひこそなけれさくら花松に千とせの色はならはで（『甲陽軍鑑』品第九）

召し寄せ御歌の会を催した。「関路の月」と題しての信玄の詠、清見がた空にも関のあるならば月をとどめて三本の松原（『甲陽軍鑑』品第三十五）

あしがきの戸ざしもよしやそのまゝにきよみがせきはみほの松原（『甲斐国志』卷之百二十二）

元亀三年十二月廿二日、信玄は三方ヶ原で織田信長・徳川家康の連合軍を破つて大勝した。その朝軍神に捧げられた歌。

ただたのめたのむやはたの神風に浜松がえはたをれざらめや（『甲陽軍鑑』品第三十九）

家康の家臣本多平八郎が甲に黒い鹿の角を立て、敵・味方の間に乗り入れ引上げた雄姿を見て、信玄の御旗本の近習小杉右近は、下記の歌をよんで見付坂にたてた。このように歌を吟ずることは、近習などにも影響していたと思われる。

家康に過ぎたる物は二つあり唐の頭に本多平八（『甲陽軍鑑』品第三十九）

（『甲陽軍鑑』品第三十九にも元亀四年四月「信玄公逝去」の条に

「信玄御歌」として

人は城人は石垣人は堀情は味方讐は敵なり

が見える。和歌は晴信の若き時代から信玄の晩年まで折に触れて吟

じられたものようである。

三 漢詩

晴信の文芸を述べるには、漢詩を除外することはできない。『甲陽軍鑑』品第十九にはこんな話が記されている。晴信は十九歳（天文八年）で年中無行儀、若小殿原衆や若女房達を集め、日中にも御座敷の戸をたて夜は乱鶏の鳴くまで狂い、星は九時分まで寝ていた。またまおもてに御出の時には出家衆を集めて詩作するという始末であった。これを見て武田の家系も二十七代目で滅亡するだろうという風聞が流れた。信州衆は伝聞して、甲信の国境にとりでを構え甲州に攻め入るに至った。飯富兵部・板垣信形ら家老衆の力で防戦することができたが、晴信の夜の狂いは止まなかつた。信形は詩をよく作る出家をわが宿に置くこと三十日余、御前への出仕は虚病を使い、万事をさし置き、二十五・六日詩作に励んだ。その後御城において、詩の会が催された時、板垣は「我らにも一首仰付られ候へ」と申し上げた。晴信公も宿老のことばであるから題をわたすと、信形は即座に詩をつくる。五首作るに及んで、晴信は驚き、いつの間に詩を習つたのかと尋ねると「この廿日あまりの稽古です。」と応える。「何としてさように精を出して習つたのか」と問うと、「御屋形様のあそばすことを御家の宿老のまねにてもつかまつらざるはいかがと存じまして」と申し上げる。晴信は大いに喜び、信形の晴信のためを思つての好意と感じ入つた。晴信の歓心を得た機会をのがさず、信形は晴信の無行儀をいさめると、晴信は涙を流し誓紙を書いて、自分の無行儀を改めることをちかつたという。この時分晴信の吟じた詩二十首ばかりが書物となり、都の名知識の序を得たよ

しも記されている。この詩集は「晴信之詩十七首並ニ序跋輯メテ一卷ト為ス」と『甲斐国志』などで言われるものである。

この詩集の序を記した名知識は、惟高妙安であり、また跋を記したのは前龍山睡足叟集堯である。妙安は南禪寺の住職であり、晴信が恵林寺の住職に迎えた高僧である。『恵林寺歴世列祖記』にも惟高妙安とその後繼者であった明叔慶俊が前後に並記されている。序跋は明叔慶俊の語錄である『明叔錄』にも収められており、原本は細川家に蔵されている。序跋やその他の関係資料を考証し、渡辺世祐博士は「大徳寺の宗佐首座が、晴信に招かれて甲斐に来り、京都に帰るに際して、晴信の詩稿を贍写し、人を介して惟高に序を求め、跋は前龍山睡足叟集堯に求めたものと推定されている（『武田信玄の経緯と修養』）。序では、「十有七絶之佳作ハ風ヲ移シ俗ヲ易ヘ、以テ述作ノ本トナル。則チ十五之国風、二雅ノ正風、以テ加フルナシ。」と絶賛している。

新正ノ口号

淑氣未_レ融春尚遲、霜辛雪苦豈言_レ詩。

此情愧被_ニ東風咲_レ、吟断江南梅一枝。

淑氣いまだ融せず、春なほ遅し、霜辛雪苦あに詩を言はんや。
此の情愧づらくは東風に咲はれん、吟じ断つ江南の梅一枝。

又

風送_ニ鶯寒_一意氣加、梅辺吟履月横斜。

因思香雪齋前夜、春若有_レ情吾約_レ花。

風送_ニ鶯寒_一意氣加はる、梅辺の吟履月横斜す。因つて思ふ香雪齋前の夜、春若有_レ情あらば吾花に約せん。

春山如_レ笑

簷外風光分外新、捲簾山色惱吟身。

屏顏亦有『蛾眉趣』、一笑靄然如『美人』。

簷外の風光分外新なり、簾を捲けば山色吟身を惱ます。屏顏も

亦蛾眉の趣あり、一笑靄然として美人の如し。

新綠

春去夏來新樹辺、綠陰深處此留連。

尋常性癖耽『閑談』、不愛『黃鸝』聽『杜鵑』。

春去り夏來たる新樹の辺、綠陰深き處此に留連す。尋常の性癖

閑談に耽る。黃鸝を愛せずに杜鵑を聽く。

薔薇

庭下留春曉露濃、淺紅染出又深紅。

清香疑自『昆明國』、吹送薔薇院落風。

庭下に春を留めて曉露濃やかなり、淺紅染め出す又深紅。清香

疑ふらくは昆明國よりす。吹き送る薔薇院落の風。

旅館聽『鶲

空山綠樹雨晴辰、殘月杜鵑呼夢頻。

旅館一声歸思切、天涯瞻恋蜀城春。

空山の綠樹雨晴る辰、殘月に杜鵑夢を呼ぶこと頻なり。旅館

の一声歸思切に、天涯を瞻恋す蜀城の春。

便面蘆間『有レ魚』（注、便面は扇の面）

山色水光烟接『天、漁翁江上棹』蘆辺。

丹青若写『得勝景』、万里風波一釣船。

山色水光烟天に接はり、漁翁江上蘆辺に棹さす。丹青若し勝景を写し得ば、万里の風波一釣船。

便面有雁

水綠山青欲雨初、數行鴻雁度長虛。

天涯高處要通信、定可『蘇卿胡地書』。

水綠に山青く雨ふらんと欲するの初、數行の鴻雁長虛を度る。

天涯高き處信を通せんと要む、定めて蘇卿胡地の書なる可し。

便面水仙梅花

風送清香寂寥浜、諸公携酒又逡巡。

与梅胡有『弟兄約』、黃玉花開一樣春。

風は清香を送る寂寥の浜、諸公酒を携へて又逡巡す。梅と胡らに弟兄の約有り、黃玉花は開く一樣の春。

便面半月照『梅花』

昏月橫斜欲夜時、梅花秀色似臘脂。

湖山疎影茂陵裏、涼水風標元祐枝。

湖山の疎影茂陵の裏、涼水風標元祐の枝。

便面蘆間『白鷺』

蘆葦清風垂頂糸、窺魚白鷺水生涯。

江南記得曾遊夕、似見『梨花院落時』。

蘆葦清風に頂糸を垂れ、魚を窺ふ白鷺水の生涯。

江南記得曾遊の夕、梨花院落の時を見るに似たり。

寄『濃州僧』

氣似『岐陽九月寒』、三冬六出朱欄。

多情尚遇『風流客』、共對『士峰』吟雪看。

氣は岐陽九月の寒さに似て、三冬六出朱欄に洒ぐ。多情も尚し

風流客に遇はば、共に士峰に対ひ雪に吟じて見ん。

集堯は跋で「予之ヲ手ニシ、之ヲ口ニシテ吟玩シテ止ム所ヲ知ラ

ザル也、嗚吁近世ノ儒流、決シテ此ノ作無シ。何ゾ岡ラン、刑名ノ家復タ此ノ佳篇ヲ観ントハ。」と賞賛している。『甲陽軍鑑』品第三十九には、元亀四年（一五七三）二月信玄は野田城を攻略し長篠城に入つたが、程なく煩うようになった。やがて臨終の容体となつた。その際のことを次のように記している。「山県三郎兵衛をめし、明日は其方旗を瀬田にたて候へと仰せらるるは御心みだれて如シ此ノ。然しかれ共少有りて、御目を開き仰せらるるは、大底ハ他ノ肌骨ノ好ニ還ス

紅紛ヲ塗ラズ自ラ風流。

とありて、御とし五十三歳にして、おしむべしおしかるべし、あしめたの露ときえさせ給ふ」と。この記事によれば信玄は晩年まで漢詩への愛着を持っていたと言えよう。

四 連 歌

甲府市積翠寺には、万松山積翠寺がある。臨濟宗妙心寺末である。かつて境内に泉が流れいて、高さ八・九尺の巨石に激しい滝となっていた。『甲陽軍鑑』や古文書などに「石水」と記されているのは、その石水に基づくからであるといふ。晴信は大永元年冬この積翠寺で生まれた。庫裡の裏、東北の隅には、晴信産湯の井戸があり、境内の西南の隅には、産湯天神が祀れている。そうした由緒だけでなく、晴信公倭漢聯句、賦何路連歌という貴重な文化財が所蔵されていることも忘れてはならない。倭漢聯句は和漢連句とも書き、室町時代に僧侶で漢詩を愛好する者と公家や連歌師などが一緒に力を合わせて集団で作成した作品が多い。晴信公倭漢聯句は発句が信玄の和句で始まり、脇を五言の漢句で付け、第三が漢句で続き、第四が

和句で続くというように、和句と漢句を交互に接続していくのである。室町時代の末になると、狂詩や俳諧が盛んになつたが、これは和漢俳諧や漢和俳諧ではなく、中世に張行された和漢連歌である。和漢連歌の場合には、初句が和句、第二句目すなわち脇は漢句で、その句の末の漢字の韻を以つて、後に付けられる漢句は一つ置きにその句の末の漢字を押韻する。和句は押韻には関係がない。句数は全体として和句漢句を同数にする。また八句目と最終の句（揚句といふ）は漢句にしなければならない。連続する句数は、和句・漢句共に五句までとするが、漢句で対句となつている場合は六句統けてもよい。連句ほど繫鎖な規則はないが、上に記したような規則に従わなければならない。

天文十五年七月廿六日於ケルニ積翠寺一倭漢聯句

心もて染ずはちらじ小萩原 晴信

新霜有雁來

竜

搗衣空外力

鳳栖

かり寝の夢のさめるほどなき

蘭

月は猶残る雲間に影涼し

台運

曉雨はるるあととの山の端

其阿

水上もわかず落くる滝見えて

惠臨

竜門魚曝腮

湖月

名に高き道をぞあふぐ家の風

長伝

末まで色のふかきことの葉

周闇

写情春意緩

晴信

政質泰爻回

鳳栖

八重咲もひとへを花の初めにて

竜

うすき露に匂ふ梅の香

仮山含万象

巨海極三才

潮与佩声漲

泉令琴韻摧

記青歌月出

星まつる夜の半天の雲

稀にあふ露の契はうきちぎり

不跡草無媒

占隠人倫絶

ひとり伴ふ友鶴の声

尽欲縮湘景

漕ゆく船の遠きうら波

仄にも見渡しかすむ朝朗

花の香ふかく日ののこる空

鶯舌啼春破

帰る山路は霧やむせばん

就荒黃落宋

ゆく心千里隔つる波もなし

幾度緑徘徊

吟履為誰湿

詩篇教仏推

法もただ謀をや道ならん

身を治てぞ世をおさめしる

信常

蘭

竜

鳳栖

晴信

台運

其阿

蘭

竜

竜

湖月

晴信

台運

其阿

蘭

竜

湖月

晴信

台運

其阿

長伝

湖月

晴信

台運

其阿

蘭

竜

周闇

何事も心を種のわざなれや
わするゝ草のしげらざもがな
若盟兄弟好
ねぐらの鳥の去さらぬこそ
惠臨

竜

晴信

鳳栖

六句、蘭

五句、台運

三句、其阿

四句、惠臨

二句、信常

二句、

湖月

（法泉寺先住）

五句、長伝

三句、

周闇

二句。

この和漢連歌は、天文十五年（一五四六）七月二十六日、後奈良天皇の勅使として甲斐に来て、大納言三条西実澄卿と参議中納言四辻季遠卿とを迎えて張行されたものである。句数は四十四句からなつていて、四十四連歌といわれる形式である。

三条西実澄（永正八一年正七）は初名を実世、後実澄、更に実枝と称し、三光院（と号し、法号を豪空（一説玄覚）と名乗つた。祖父は実隆（みのる）、父は公条（きみのり）で、幼少の折から父祖の教えを受け、十六・七歳の頃から自亭で和歌や連歌の会を催した。積翠寺の和漢連句に参加したのは三十六歳の時であった。更に天文二十一年から駿河の国に七年滞在し、弘治四年（一五五八）八月帰京したが、永禄二年（一五五九）には再び駿河に來り十一年間も滞在し、永禄十二年に甲斐の国を経て上洛した。実澄は細川幽斎に古今集の講義をしただけでなく、古今伝授の証明認可状を与えたことで有名である。『三光院歌

集』『夷澄卿百首』『三光院内府』などと共に、源氏物語の注釈書『明星抄』五十五巻がある。四辻季遠も連歌の嗜みが深かった。法泉寺に居た湖月、東光寺の鳳栖、江戸月輪寺の其阿など多数の高僧と共に、積翠寺和漢連句は花やかに張行されたのである。晴信が生涯連歌に関心を持ち続けたことは、『甲陽軍鑑』品第三十二に、三河国長沢から岡田堅桃の肝煎で、保田香清という連歌師

を召し寄せ扶持を与えられた記載があることなどから推察できる。香清が信玄に御挨拶申し上げない前に、「ちぎりあれや春待得たる花の友」と吟じて香清に遣わされ、香清の至るや、この句を発句として百韻の連歌を御前で張行させたのである。信玄の風流も並々でないようと思われる。

（市史編さん専門委員）